

大学生への小論文指導

～構成に着目した論理的文章の書き方～

Teaching short thesis for university students

～ How to write logical sentence that focuses on the structure of text ～

篠原京子

SHINOHARA Kyoko

1 はじめに

文章の書き方の本が町の本屋に山積みになっている。これは、社会に出てから多くの人達が独学で「文章の書き方」を学習している証拠である。また、本学の大学1年生を対象に文章を書くことについてアンケートを実施したところ、苦手意識をもっている学生が多いことも分かった。これらの原因として、小中学校及び高等学校の国語科教育で「書くこと」の指導が適切に行われていない実態が考えられる。この現状に対応するため、以下、大学生に対する論理的文章の書き方指導の実践について述べる。

2 文科省の高校国語改定案

右の新聞記事にあるように2016年2月19日、文科省は、高校国語の科目改訂案を示した。¹⁾これまで文章の読解中心だった高校の国語科教育を反省し、「現代の国語」と「言語文化」(仮称)の二科目を必修とする。これは「読む」中心の受信的な高校の授業を改め、「話す・聞く・書く」という実社会で役立つ発信的な国語力を高めることを目的とした改定である。

2016年(平成28年)2月20日(土曜日)

高校国語科目見直し案

文科省 表現力育成を重視

文部科学省は19日、2022年度以降実施する高校の次期学習指導要領で、国語の必修科目「国語総合」を廃止し、書く力や話す力を育成する「現代の国語」と、口本語に関する文化などを学ぶ「言語文化」の2科目を新設する見直し案を提示した。選科科目も現行の5科目を4科目に再編し、読解中心の学習を改め、表現力育成を重視した授業を目指す。

見直し案によると、現行の国語の授業は文章の読解が中心で、教師から生徒への一方通行な講義になりやすく、論述や議論など表現活動が不十分と指摘。主

【現行】国語総合
国語表現A B
現代文A B
古文A B
古典

【再編後】現代の国語
言語文化
論理国語
文学国語
国語表現
古典探究

【現代の国語】「現代文A」「現代文B」「古文」「古典」の5科目の再編も提案。代わって、自分の考えを論理的に表現する力を育てる「国語表現」、小説や文を軸に伝統的な言語文化への理解を深める「古文・古典」の2科目を必修とする。これは「読む」中心の受信的な高校の授業を改め、「話す・聞く・書く」という実社会で役立つ発信的な国語力を高めることを目的とした改定である。

(2016年2月20日付 読売新聞朝刊 39面)

図1 高校国語科見直し案

3 書けない大学生

2016年7月8日付け読売新聞の「大学の實力」(特集記事)には、論理的文章を書けない大学生と、その対策に取り組む大学の實態が報告されている。²⁾

文章、書けますか

1年生必修 實力別3クラス 創価大

日本語の文章の書き方を初歩から学ばせる取り組みに、多くの大学が真剣に挑み始めた。「書けない学生」の存在が深刻な問題となっているからで、そこで、今年の「大学の實力」調査は「書く力」をテーマとした。回答から浮かび上がったのは、社会で不可欠の能力と位置づけ、教員配置や教材作りにも注力する様々な実践だった。全学的な活動のスケールが際立つ創価大学の現状を報告する。

5月下旬、緑あふれる東京・八王子の創価大キャンパス。パソコンが並ぶ教室で、40人の学生が画面を見ながら手元の紙に鉛筆を走らせていた。1年生の必修授業「学術文書作法I」だ。この日は、それぞれが自由にテーマを選び、パソコンで調べ、レポートにする内容だ。学生のテーマを見ると、アフリカの少年兵、柔道とJUDOの違い……。

レポートや発表を目標に、文献の読み方、引用のマナー、分かりやすい文章の書き方などを教える。「書く」に力を入れる授業は2003年、馬場等久学長(63)の発案で始まった。「報告書も書けない学生を社会に送り出さない」。学力格差が進み、「小学生レベルの文章」も見受けられるようになった状況に危機感を抱いたという。

当初は選択制だったが、それでは足りない、と2年前に必修化した。「日本語による多様な表現方法を習得し、明確に論述する」を到達目標に、専任スタッフを1人置いて独自教材を開発。入学式前日テストを行

って、新入生約1600人を實力別の3クラスに分け、半年間15回授業。個別指導の場も常設した。

レポートは必ず手書き。コピー出来ないから、資料を読み、考える力がつく。提出されたレポートは、必ず添削して返却する。その過程で、山崎めぐみ准教授(49)は「基礎を培うべき小中学校で、適切な添削指導を受けていないのでは」と疑った。例えば、です・ます調でなく「である調で」と指示すると、「考えるのである」と勘違いにも「ある」を付ける。「だと思つた」の類出も特徴だ。改行時の「下」も身についていない。

個々の「知的好奇心の差」も大きく、下位クラスは「何を書けばいいか」とテーマ設定でつまづく。先生の質問を持つが、自ら問う姿勢が育っていない。そのため、学生自身にレポートのテーマを決めさせる。

一方、上位クラスは、要領よく文章を書けることで優れ、欠席がちに。単位を落とし、再履修になるパターンが目立つという。

勢い指導に力が入るが、学生からは負担が重いと不満の声が上がり、「書く力」をさらに伸ばす授業が2年次以上には少ないなど、課題はある。それでも、成長を実感する学生は少なくない。文学部2年の田代陽子さん(20)は「書くことに苦しみ、嫌がなくなつたと笑顔で話す。カリキュラム責任者の岡田一彦教授(56)は「確実に状況は改善している。どれだけ書く力が伸びるか測るシステムをつくりたい」と意気込みている。

(専門委員 松本美奈)

(2016年7月8日付 読売新聞 特集「大学の實力」より)

図2 書けない大学生

大学生の實態を調べるために、「文章を書くことについてのアンケート」を実施した。アンケートの概要及び結果は以下の通りである。

(1) 目的

本調査(アンケート)は、大学1年生が文種及び文章を書くことについてどのような意識を持っているかを調査し、今後の文章を書くことの指導の参考にすることを目的としている。

(2) 調査期間及び調査対象

- ① 2015年9月15日 常葉大学保育学部1年生100名
- ② 2016年4月15日 常葉大学保育学部1年生81名

(3) 調査方法

筆者の担当する講義の受講者にアンケート用紙を配布し、講義の時間内に配布、記入させ、その場で回収した。

(4) 調査内容

- ① 文章を読んだり書いたりするときに、論理的文章と文学的文章を区別していますか。

読むとき ア 区別している イ 区別していない

書くとき ア 区別している イ 区別していない

- ② 文章を書く技術は、あなたにとって必要だと思いますか。

論理的文章 ア 必要である イ どちらかという必要である

ウ どちらかという必要ではない エ 必要ではない

文学的文章 ア 必要である イ どちらかという必要である

ウ どちらかという必要ではない エ 必要ではない

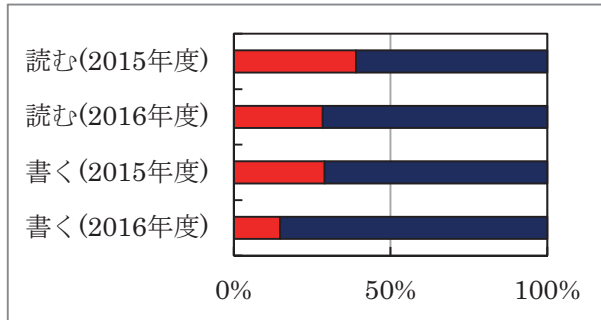
③論理的文章を書くことについてどう感じていますか。

ア 得意である イ どちらかという得意である

ウ どちらかという苦手である エ 苦手である

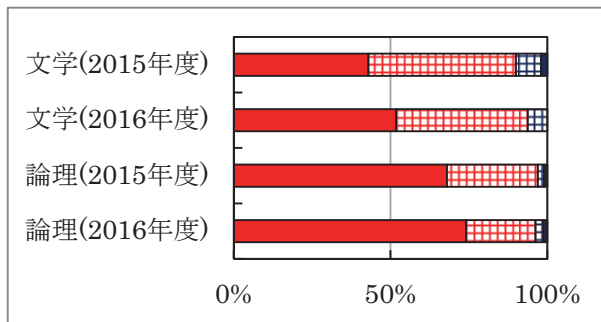
(5) 調査結果（調査内容の質問項目①～③とも有効回答率 100%）

①文章を読んだり書いたりするときに、論理的文章と文学的文章を区別していますか。



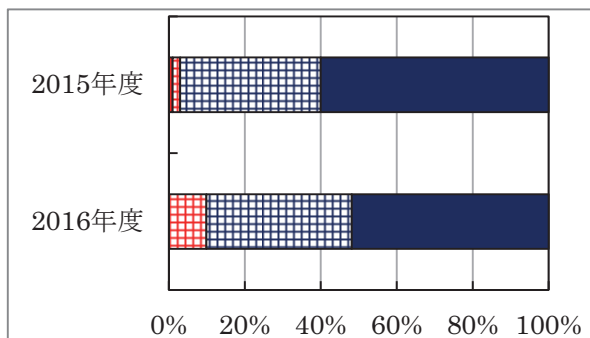
年度別アンケート調査結果				
	2015年度		2016年度	
	読む	書く	読む	書く
区別している	39%	29%	28%	15%
区別していない	61%	71%	72%	85%

②文学的文章・論理的文章を書く技術は、あなたにとって必要だと思いますか。



年度別アンケート調査結果				
	2015年度		2016年度	
	論理	文学	論理	文学
必要である	68%	43%	74%	52%
どちらかという必要である	29%	47%	22%	42%
どちらかという必要ではない	2%	8%	3%	6%
必要ではない	1%	2%	1%	0%

③論理的文章を書くことについてどう感じていますか。



年度別アンケート調査結果		
	2015年度	2016年度
得意である	1%	0%
どちらかという得意である	2%	10%
どちらかという苦手である	37%	38%
苦手である	60%	52%

図3 「文章を書くことについてのアンケート」結果

(6) 考察

①論理的文章と文学的文章を「区別している」学生が「区別していない」学生に比べて少ない。

②論理的文章を書く技術が「必要である」「どちらかという必要である」と答えた学生は、2015 年が 97%、2016 年が 96%であり、ほとんどの学生がその必要性を感じていることが分かる。

- ③論理的文章を書くことについて、「苦手である」「どちらかという苦手である」と答えた学生は、2015 年が 97%、2016 年が 90%であり、ほとんどの学生が苦手意識を感じていることが分かる。
- ④②と③の結果を合わせて考察すると、2 年間のいずれの調査においても、調査した学生の 90 パーセント以上が論理的文章を書く技術の必要性を感じながら、苦手意識を感じていることが分かる。
- ⑤一方、文学的文章を書く技術についても「必要である」「どちらかという必要である」と答えた学生が、2015 年が 90%、2016 年が 94%であり、やはりほとんどの学生が必要性を感じていることが分かる。
- ⑥論理的文章と文学的文章の読み方・書き方、及び、論理的文章は社会生活において書く技術が必要であるのに対して文学的文章は誰もが書ける必要はない、という相違点について、大学以前の国語科教育において十分な理解が図られていないことが分かる。

以上のことを踏まえ、大学1年生の「日本語表現と理解」の授業において、論理的文章の書き方を指導することにした。

4 論理的文章と文学的文章の違い

文章指導を効果的に進めるためには、「論理的文章」と「文学的文章」に分ける必要がある。小川（2014）³⁾は論理的文章と文学的文章を区別することが必要であると述べている。これを参考に、筆者がまとめた論理的文章と文学的文章の相違点を表1に示した。両者は「目的・構成・文章の単位・文体・言葉・種類」が異なる。その違いを認識した上で、文種に応じた指導をする必要がある。

表1 論理的文章と文学的文章の相違点

	論理的文章	文学的文章
目的	正確な情報の伝達	他の人生に学ぶ、楽しむために読む
構成	論理的な形式を持つ はじめ・なか・まとめ・むすび など 論理的順序	はじめ・なか・おわり など自由 時間的順序
文章の単位	段落	場面
文体	1 段落 1 事項（1 つのキーワード） 分かりやすさ	語り・会話・描写 比喻・倒置等の技法、美文
言葉	論理の言葉	詩の言葉
種類	記録・説明・報告・論説	詩・物語・小説・随筆 等

5 論理的文章の種類

「論理的文章」については国語科の小中高の各教科書で、意見文・紹介文・感想文などに細かく分類されているが、市毛（2010）は、「小論文の種類」として以下のように述べている。⁴⁾

「新学習指導要領のように数多い文種の説明よりは、「記録・報告・論説・説明」と四種類の基本的文種に限定して書き方に習熟させ、その後、各文種の違いに慣れる指導法が小中学生にふさわしいと考えている」

市毛の指導法は、小中学生を対象とした提案であるが、篠原は、90%以上が書くことに苦手意識を持っている大学1年生への基礎指導としてこの4つの分類が有効と考える。市毛（2010）の述べる4種類の文種の特徴⁵⁾を参考に以下のように定義した。

- ①記録…ことがらを時間通りに書いた文章。「なか1・なか2・なか3…」。日記・観察記録・実験記録等。主に、他のことに活用するための情報を収集したり、その消失を防ぐために書き留めたりするために書く文章。
- ②説明…1つの事実や現象について、その構造、役割、性質、性能等を分かりやすく書いた文章。「はじめ・なか1・なか2・なか3…・まとめ」。「まとめ」は形式的であることが多く、省略されることもある。情報そのものの伝達を目的とした文章。「なか」（具体例）の交換はできない。
- ③報告…複数の事実や現象から分かる新しいことがらの発見を書いた文章。自然科学の論文はすべて報告である。「はじめ・なか1・なか2…・まとめ」。「なか」は文章、写真、統計等。現象新発見の報告は、多数の追試による確認を経て「事実」として認定される。「なか」（具体例）の交換が可能。
- ④論説…記録・報告をもとにして、1つまたは複数の考察から導き出した主張（むすび）を伝えることを目的とした文章。経済学・教育学・社会学等の論文、新聞社説・月刊雑誌（文藝春秋・中央公論等）の人文科学論文等。

6 大学における論理的文章の書き方指導

6-1 論理的思考力・表現力を育てる理論指導

6-1-1 2つの論理

論理的思考について、市毛（2011）は、「論理的に考えを進めるためには、『演繹的推論』と『帰納的推論』という二つの進め方が知られている」⁶⁾と述べている。

市毛の述べる2つの論理的思考⁷⁾について以下、筆者が要約して示す。

「演繹的思考」は古代ギリシャのアリストテレスによって体系化され、中世ヨーロッパでキリスト教のもと展開された推論の方法で、言葉と言葉の関係をとらえる思考といえる。1つの命題から新しい命題を導く推論の方法で、現在では、数学や記号論理学としてコンピュータに利用されている。

「帰納的思考」は17世紀前半、イギリスのフランシス＝ベーコンが発見した推論の方法で、観察や実験から事物と言葉の関係をとらえる思考といえる。複数の具体例から共通の性質を発見する推論の方法で、現在では自然科学全般に利用されている。

6－1－2 論理的思考力・表現力を支える基本事項

論理的思考力・表現力を育てるために必要な基礎知識として、『新国語科の重点指導第1巻 論理的思考力の育て方〈重点指導項目20〉』（市毛勝雄編・明治図書 2009 pp22-75）に示された15項目（①論理的思考の基礎 ②名付け ③詩の言葉と論理の言葉 ④具体と抽象 ⑤主語と述語 ⑥文の構造 ⑦段落の作り方 ⑧論証と文章構成 ⑨キーワードを決める ⑩キーワード表を作る ⑪粗い文章と詳しい文章 ⑫バイアスワード ⑬事実を読む ⑭演繹的思考 ⑮帰納的思考）を講義で取り上げて指導した。

6－2 市毛式小論文指導の実践

6－2－1 市毛式小論文とは何か

論理的文章の書き方指導として、市毛（2010）が提案する小論文指導の方法⁸⁾に従い、実践を試みた。これを本稿では「市毛式小論文指導」と呼ぶことにする。ここでの「小論文」とは、文字数は400字以内、段落数は5段落、「はじめ」「なか1」「なか2」「まとめ」「むすび」の基本的な構成をもつ、練習用の短い論理的文章を指す。

〈形式〉※400字（20字×20行）

構成		役割	行数
はじめ		全体のあらましを書く。	2行
なか	1	一つの具体例を詳しく書く。感想・意見は書かない。	7行
	2	「なか1」とは別の具体例の一つ書く。感想・意見は書かない。	7行
まとめ		「なか1」と「なか2」に共通する感想・意見を書く。	2行
むすび		「まとめ」の感想・意見が全ての人にあってはまるという主張を書く。	2行

筆者は、この市毛の提案する文章構成で論理的文章を書くことによって、帰納論理と演繹論理を効果的に組み合わせた論理的思考・表現ができると考える。なぜなら、「なか1」と「なか2」の2つの具体例の共通性を「まとめ」に書くところで帰納論理が働き、「まとめ」を一般化して「むすび」を書くところで演繹論理が働くからである。この文章構成を用いて2つの論理的思考を有効に活用しつつ、混沌とした現実を分かりやすく整理したり、未知の事象について推測したりする力を育成したい。

以下、市毛式小論文指導の手順で篠原が行った小論文指導の実践を報告する。

6－2－2 指導計画（授業4回で1つの小論文指導を行う）

第1回 キーワード表の作成（文章構成） 第2回 一次原稿を書く（下書き）

第3回 二次原稿を書く（清書） 第4回 評価の授業（文例の読み聞かせと感想）

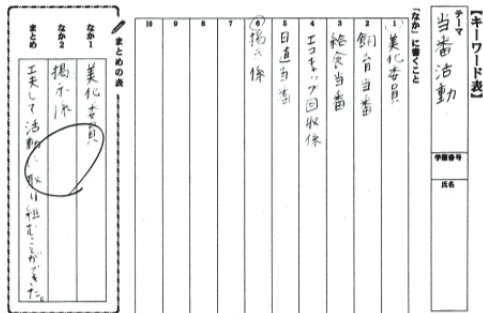


図4 キーワード表

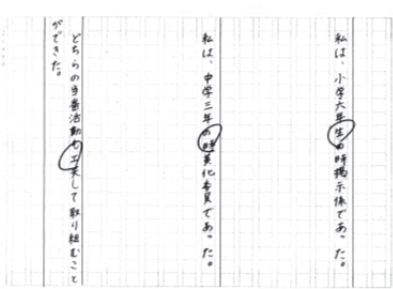


図5 一次原稿

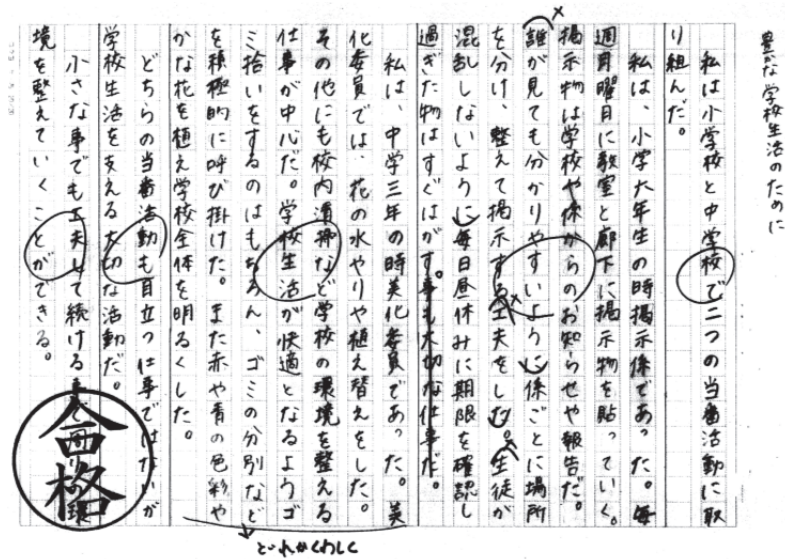


図6 二次原稿

6-2-3 テーマ例

「書き方」の学習に専念するため、大学で学ぶ内容ではなく日常の体験活動からテーマを設定した。(①「お手伝い」②「運動会・体育祭」③「係・当番活動」④「アルバイト・ボランティア」⑤保育実習等) 自分の体験は、他人の文章をコピーできないという利点がある。また、抽象度を操作して字数を調節する学習ができる。

6-2-4 小論文指導の4つのポイント

①構成

400字詰め原稿用紙(20字×20行)を、「はじめ」2行、「なか1」7行、「なか2」7行、「まとめ」2行、「むすび」2行の赤線で区切らせる。枠をとることによって、段落の概念が明確になる。また、どこに何をどのくらい書くかが可視化されるため、短時間で書ける。

②段落

赤線で区切ったひと枠が一段落となる。全員に五段落の文章を書かせる。各段落の初めのひとマスを空けることを指導する。

③キーワード

一つの段落には一つのキーワードの内容を書き、行が余ったら空欄にさせる。この繰り返しの指導により、一段落一事項の分かりやすい文章が書けるようになる。

④事例の具体的記述

具体的事例では、日時・個数・色・形等の事実を詳しく記述させる。次第に7行では書き切れなくなるが、「まとめ」で述べる感想・意見にとって説得力のある事実を選択してより効果的な7行にするよう指導する。具体的事例を記述する技術は、文学的文章の描写を読むことによって、さらに向上する。

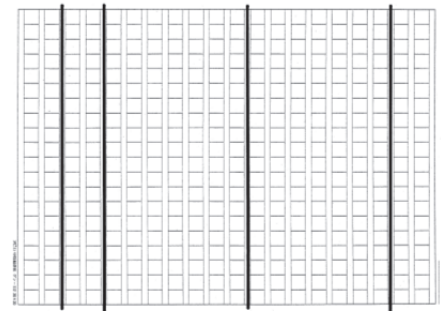


図7 原稿用紙

6-2-5 小論文指導の教材（本稿 pp16-17〈付録1～3〉に掲載）

①「小論文の書き方」 ②キーワード表 ③どちらがじょうずかな

6-3 小論文指導の評価

6-3-1 板書添削

「まとめの表」、一次・二次原稿の「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」を速く書いた学生に板書させる。読み上げてほめながら添削し、リアルタイムで他の学生が書くための参考にさせる。



図8 板書添削

6-3-2 評価の授業

提出させた学生の作品（二次原稿）の中から、よく書けているものを選び、教師が読み聞かせる。次回、小論文を書くための参考例とすることが目的である。「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」をそれぞれ2～3例ずつ読み聞かせる。教師が作成したよくない例も混ぜて、比較させるとさらに効果的である。

読み聞かせ後、「一言感想」を発表させる。これにより、学生は「小論文の書き方」の大切なポイントを復習できる。また、教師は学生の理解度を確認できる。

6-3-3 小論文作品の評価基準

(1) 段落毎に評価する

「はじめ」「なか1」「なか2」「まとめ」「むすび」の各段落を、◎、○、△で評価する。以下に評価基準を示す。

①「はじめ」の評価基準

○	全体の内容を表すキーワードが一つある。
△	感想や意見を書いている。

②「なか」の評価基準

◎	「まとめ」につながる一つの事柄が具体的に詳しく書けている。
○	「まとめ」につながる一つの事柄が書けている。
△	一つの段落に複数の事柄を書いている。感想や意見を書いている。

③「まとめ」の評価基準

◎	「なか1」と「なか2」に共通する性質が詳しく書けている。
○	「なか1」と「なか2」に共通する性質が書けている。
△	「まとめ」が「なか1」と「なか2」の共通する性質になっていない。

④「むすび」の評価基準

◎	「まとめ」を分かりやすく一般化できている。
○	「まとめ」を一般化できている。
△	「まとめ」を踏まえた一般化ができていない。

(2) 総合評価

優 秀	(A)	◎が1つ以上ある。△がない。
合 格	(B)	○だけ。
もっとがんばりましょう (C)		△がある。

「総合評価」として、総合的に「優秀」「合格」「もっとがんばりましょう」の3段階で評価し、評価印を押す。評価印は小論文指導のために直径約5cmの特別の評価印を作成したところ、学生の学習意欲の向上に効果的であった。



図9 評価印

6-3-4 評価の推移

以下に示す総合評価の推移は、2015年前期における常葉大学富士キャンパス社会環境学部での「日本語表現と理解」の受講者59名に対する4回の小論文指導の結果をまとめたものである。

テーマ	完成日	A	B	C	未提出	計
1 お手伝い	5 / 8	10 人	33 人	14 人	2 人	59 人
2 運動会・体育祭	5 / 29	14	43	2	0	59
3 係・当番活動	6 / 19	35	23	1	0	59
4 アルバイト・ボランティア	7 / 17	44	14	0	1	59

この結果についての考察を述べる。

- ① Aの学生が、10人（約17％）から44人（約75％）に増えた。
- ② 最終的にCの学生はいなくなった。
- ③ 1回目のCは、段落が正確に記述できていないことが主な原因であった。

以上の結果から、今回の小論文指導は論理的文章の書き方指導として効果的な実践であったといえる。

6-4 小論文作品の評価例

6-4-1 個人の変容

個人の変容を示すため、A男（大学1年生）の作品例を次頁に掲載した。（誤字・脱字は原文のままとした。）三つの小論文作品は、A男の第1作・第2作・第3作の二次原稿である。各作品の考察は次頁の各作品の下に示したので、ここでは全体的な変容について考察する。

- ① 第1作（2015年5月8日「お手伝い」）では、全ての段落が△で、評価はCだった。
- ② 第2作（2015年5月29日「運動会・体育祭」）では、三つの段落が△で、評価はCだった。
- ③ 第3作（2015年6月19日「係・当番活動」）では、「はじめ」が△だったが、◎が三つになり評価はAとなり、書く力が向上したことがわかる。

(1)第1作(2015.5.8)「お手伝い」 評価C	<p>親との約束(題名)</p> <p>私が今まで行ってきた手伝で今の自分がいられるのがあります。(はじめ)△</p> <p>私がまだ一人暮らしをしていない頃、主に行っていた家の手伝いは、風呂洗いと洗濯物干しと皿洗いであった。私は4人家族で、姉が家にいないのでよく手伝を1人で行っていた。この3つの手伝はおもに夕食後に行っていた。夕食がおわり、母と父はリビングで休む。その間に私は風呂洗をして次に食べ終わった皿を洗う。それが終わったら、洗濯物干しを行う。この作業を毎日行っていた。これが私と親との約束であった。約束のはじめは、私は中学二年生の春からだった。やはりはじめは、ため息ばかりついて、正直「なんでやんないといけないんだ」などと思っていました。(1行空き)(なか1・2)△</p> <p>ですが今、一暮らしをしている私にとつてこれまでやった手伝は、今になってわかりました。(まとめ)△</p> <p>親は将来こまらないためにやらせてくれたことだということ。(むすび)△</p>	<p>(2)第2作(2015.5.29)「運動会・体育祭」評価C</p> <p>運動会(題名)</p> <p>私は、運動会で人生で一生といえる大切な事を学んだ時がある。(はじめ)△</p> <p>運動会で一番思い出にあるのが、私が中学二年生の時にやった長縄跳びだ。長縄の練習では土曜日と日曜日を削ってまでクラスのみんなと頑張った。先生もその練習に参加していた。運動会当日、みんなと心を一つにし、全力で跳んで、記録が205回。もちろん1位。必常にうれしかった。(なか1)△</p> <p>二つ目に思い出にあるのがリレーである。</p>
〈考察〉	<p>①風呂洗いと洗濯物干しと皿洗いの3つのお手伝いが3行にまとめて書かれており、「なか」が2つに段落分けされていない。</p> <p>②「なか」に事実ではなく感想・意見が多く書かれている。</p> <p>③常体と敬体が混在している。</p> <p>④「まとめ」「むすび」の段落の初めが「マス下がつていない」。</p>	<p>〈考察〉</p> <p>①「なか1」以外の段落を正しく表記できた。</p> <p>②「なか1」は「長縄」という1段落1キープで書けた。</p> <p>③「むすび」で価値の一般化が図れた。</p> <p>④「はじめ」「なか1」に感想が書かれている。</p> <p>⑤「まとめ」が不明確。</p>
(2)第2作(2015.6.19)「係・当番活動」 評価A	<p>責任感(題名)</p> <p>係や日直当番は、つねに責任感を持ってやると先生に言われていた。(はじめ)△</p> <p>日直当番は、2人で一週間やる。これは、クラスのみんながかならず日直当番になる。日直当番の人は、朝早くに先生の所に行つて日直日誌を受け取りに行かなくてはならない。私と友人が日直当番の時に、私が朝、日直日誌を先生の所に取りに行くのを忘れてしまいもう一週間日直当番をやることになった。(なか1)○</p> <p>私は、教科係で生物をやっていた。生物の教科は、よく授業を行う場所が変わる。時には教室でやったり、時には生物室で授業をする。教科係は、事前に授業の行う場所を担当の先生に聞く。ある時、私はその仕事を忘れて友人と話していた。そしたらクラスの人が今日は「どこ」と聞かれて私は、戸惑った。(なか2)○</p> <p>日直当番での失敗と教科係での失敗で、他のみんなが苦労をしてみた。(まとめ)◎</p> <p>係や当番などは責任感を持つてやらなくてはならない。(むすび)◎</p>	<p>それと中学二年生の頃で、自分のチームの中に1人、足手纏いの子がいた。その子とはとても優しい子でみんなからの信頼もあった。そのため、みんなはイライラせず全員でその子の練習を手伝った。本番では、1位ではなかったが、その子を責めたりはしなかった。(なか2)○</p> <p>これまでの思い出を考えると、なぜ205回とべたか、なぜあの子は責められないのか。(まとめ)△</p> <p>この時チームワークの大切と人との信頼が大切であることを学んだ。(むすび)○</p>
〈考察〉	<p>①「なか2」は、仕事を忘れたときの状況が分かりやすく書けている。「戸惑った」をもっと具体的に書ければさらによかった。</p> <p>②「むすび」では、「責任感」という他にも共通する価値が一般化して述べられている。</p> <p>③「はじめ」は、「責任感」という意見を述べてしまったので△だが、◎が3つあるので「A」評価とした。</p>	

図10 個人の変容

6-4-2 「なか」（具体的事例）の書き方についての考察

<p>〈「なか」の評価が△だった例文〉</p> <p>(1) テーマ「お手伝い」</p> <p>僕は、月曜日と火曜日と木曜日の朝にゴミ捨てをしている。四人家族で、燃えるゴミがよく出るので、月曜日にゴミ捨てをしても二日でゴミ袋がいっぱいになる。ゴミ捨ては朝しか行っていないのでその日はなるべく早く起きなければならない。</p> <p>〔修正例〕</p> <p>僕は、月曜日と火曜日と木曜日の朝にゴミ捨てをしている。四人家族で、燃えるゴミがよく出るので、月曜日にゴミ捨てをしても二日でゴミ袋がいっぱいになる。ゴミ捨ては朝しか行っていないのでその日はなるべく早く起きなければならない。</p> <p>〔考察〕</p> <p>① 一段落一事項の書き方ができていない。</p>	<p>〔修正点〕</p> <p>① 一段落一事項となるように記述する。</p>	<p>(2) テーマ「お手伝い」</p> <p>私は毎日食器洗いをする。私は食器を洗うことが楽しいので、自らやっています。食器洗いをすることで気分が晴れるような気がする。</p> <p>〔修正例〕</p> <p>私は毎日食器洗いをする。汚れた皿や茶碗に洗剤をつけて洗い、水で流す。鼻歌が出ることもある。食べ終わって「ごちそうさま」と言うときすぐ立ち上がって洗い始める。汚れた食器がなくなり、洗い終わった食器をきれいに拭いて戸棚へ片付ける。何もなくなつた流し台のまわりを最後にフキンで拭く。</p> <p>〔考察〕</p> <p>① 気持ちばかりで、具体的な事実がほとんど書かれていない。</p>	<p>〔修正例〕</p> <p>私は毎日食器洗いをする。汚れた皿や茶碗に洗剤をつけて洗い、水で流す。鼻歌が出ることもある。食べ終わって「ごちそうさま」と言うときすぐ立ち上がって洗い始める。汚れた食器がなくなり、洗い終わった食器をきれいに拭いて戸棚へ片付ける。何もなくなつた流し台のまわりを最後にフキンで拭く。</p> <p>〔考察〕</p> <p>① 「楽しい」「自らやっています」「鼻歌が……」「すぐに立ち上がって……」という具体的な行動で記述する。② 「気分が晴れる」という気持ちの記述を「汚れた食器がフキンで拭く」と具体的な行動で表現する。</p>
<p>〈「なか」の評価が○だった例文〉</p> <p>(3) テーマ「運動会」</p> <p>小学校の運動会では毎年、五、六年生が組み体操をする。組み体操は一人では完成することができない競技だ。土台となる人と、上に乗る人や、隣の人、全員とタイミングを合わせる必要となる。そのために、体育の時間などに、暑い中、何度も練習をくりかえす。</p> <p>〔修正例〕</p> <p>小学校の運動会では毎年、五、六年生が組み体操をする。五年生六十五名、六年生七十七名、計百三十七名で完成させる。土台となる人と、上に乗る人や、隣の人、全員と、先生の笛の合図に合わせて一斉に動く。そのために、体育の時間などに、気温三十度の中、一日二時間の練習を二週間続ける。</p> <p>〔修正点〕</p> <p>① 「一人では完成することができない競技だ」「タイミングを合わせる必要となる」「暑い中」「何度も練習をくりかえす」を具体的に記述する。</p>	<p>〔修正点〕</p> <p>① 「一人では完成することができない競技だ」「タイミングを合わせる必要となる」「暑い中」「何度も練習をくりかえす」を具体的に記述する。</p>	<p>(4) テーマ「アルバイト」</p> <p>高校三年生の冬に、地元の喫茶店で三か月程働いた。主な仕事は接客やレジ、皿洗い、料理運搬だ。地元では人気のお店だったので、お昼頃は三十人以上の客で満席になった。レジでは「一万円入ります」と声をだし、おつりを客と一緒に確認した。皿洗い直後に料理を運ぶ時は、滑らないようによく手を拭いた。</p> <p>〔修正例〕</p> <p>高校三年生の冬に、地元の喫茶店で三か月程働いた。主な仕事は接客やレジ、皿洗い、料理運搬だ。地元では人気のお店だったので、お昼頃は三十人以上の客で満席になった。レジでは「一万円入ります」と声をだし、おつりを客と一緒に確認した。皿洗い直後に料理を運ぶ時は、滑らないようによく手を拭いた。</p> <p>〔修正点〕</p> <p>① 「人がたくさん来た」を数字で記述する。② 「失敗しないように落ちていないための具体的な行動として記述する。」</p>	<p>〔修正点〕</p> <p>① 複数の仕事内容が羅列されているだけで、一つ一つの様子が分からない。② 「落ちていないようにしていた」とあるが、具体的にどうしたか分からない。</p>

図 11 「なか」の評価例①

<p>(8) テーマ「係・当番活動」</p> <p>小学六年の時牛乳パック係をやった。クラパスの人が飲み終わった二〇〇ミリリットルのパックを開いて出してもらったらまず水で洗って流す。その後箱に水を入れ牛乳パックを中に入れて押しつけ水が汚れたら変える作業。水がきれいになるまでくり返す。最後に箱に入れ干すが冬は手がかじかむ。</p>	<p>(7) テーマ「係・当番活動」</p> <p>次に、グラウンド脇にあるニワトリ・ウサギの飼育小屋係を小学校六年生の時に担当した。ふんの掃除、皿に飲み水を用意したりエサを作ったり、ウサギの途中でニワトリにつつかれたり、ウサギにかまれて泣き出す子も周りにいた。この仕事は月・水・金曜日にしていた。</p>	<p>(6) テーマ「運動会・体育祭」</p> <p>高校三年生の時、竹取りをやった。体育の時間では、作戦を立てた。取る竹をしぼるという作戦だ。本番では、三人一組で竹を取りに行った。前日に雨が降ったため、グラウンドはぬかるんでいて、ふんばりがきかなかった。結果は一勝一敗だった。</p>	<p>(5) テーマ「お手伝い」</p> <p>夜ご飯を、家族6人が食べ終わった後、私は皿洗いをした。6人分の皿は全部で20枚ぐらいいり、洗剤と水をたくさん使う。油污れがひどいフライパンやご飯粒がとれにくいご飯茶わんは、お湯につけておき、汚れが落ちやすくなるようにしている。皿洗いが終わったら、緑茶を飲んだ。</p>
<p>①手順を詳細に書くことで大変さを伝えることができた。</p> <p>②「手がかじかむ」でつめたくても頑張る様子をイメージで伝えることができた。</p>	<p>①仕事の大変さを「ウサギにかまれて泣き出す」などの事実で表現できた。</p>	<p>①作戦の内容を具体的に書くことで、協力を表現できた。</p> <p>②大変さを「ふんばり」「泥まみれ」で表現できた。</p>	<p>①「20枚ぐらい」という皿の数で大変さを表現できていた。</p> <p>②仕事後の休息を事実で表している。</p>

図 12 「なか」の評価例②

図 11 と図 12 には、「なか」（具体的事例）の評価例を示した。この小論文指導において学生は「なか」（具体的事例）の書き方に最も難しさを感じていた。そこで、「なか」の評価が△○○だった作品例について考察し、今後の指導に生かしたいと考えた。評価△と○の作品に付した【修正例】は筆者が作成したものである。

6-5 学生の感想（傍線は筆者による）

小論文指導後に学生が書いた感想を示し、この小論文指導の成果を明らかにする。

- ①私はこの講義で初めて小論文の書き方を知った。高校までの間に小論文を書く機会は何度かあったが、具体的な書き方を知らずに書いていたため、まともな小論文が書けなかった。しかし今回、細かいことまで知ったため、以前に比べてしっかりした内容の小論文が書けるようになった。
- ②小論文では、キーワードと「まとめ」の文を決めて書くことや、具体的な数値や場所を書くことで詳しい文章にすることを学んだ。小論文のような論理的文章には、各段落ごとにキーワードがあり、文章の内容把握に役立つことが分かった。
- ③高校でやっていた小論文とは違い、文の基礎から学んだ。詩の言葉と論理の言葉の違い、論理的思考の基礎、具体と抽象の違いといった高度なものから、主語と述語の関係、段落の作り方、原稿用紙の使い方などの基本的なもののまでを教えてくれた。
- ④今までに書いてきた小論文がいかにでたらめであったかがあきらかになった。初めて知ることが多く、とても分かりやすくて納得できた。私は小論文に自信がなかったが、正しい書き方を学んだ今は自分にも書けるという自信がついた。

- ⑤他の講義でも、習った文章構成を意識して書くようになった。私は小学校の時から現在まで文章を書くことに苦手意識を持ち、なかなか自分の意見や考えを表現することができなかった。しかし、この講義で論理的な思考を身に付けることでまとまった文章を書けるようになった。
- ⑥私は講義で小論文を書いた。一回目の講義のプリントには書き方が詳しく書いてあって分かりやすかったが、一作品目はやたら段落が多くてC評価だった。原因が分かると二作品目からB評価をとるようになり、最終的にはA評価まで登りつめることができた。小論文を書くコツが分かり上達した。
- ⑦高校生の時は、小論文を書くのに一日で終わらすことはできなかった。しかし、この講義を受けてから、小論文を書くのが速くなった。特に成長したことは「なか」の部分がまとまりのある文を書けるようになったことだ。「なか」の具体例では、場面の中心を決めて中心を書くようにした。

7 成果と課題

7-1 成果

- ①学生の感想、作品例、作品の評価の推移から、大学生への論理的文章の書き方指導として、市毛式小論文指導は有効であったと考える。
- ②小論文指導のポイントを「構成」「段落」「キーワード」「事例の具体的記述」の4つに絞ったことで、効果を上げることができた。

7-2 課題

- ①「論理的文章」の書き方指導を体系化し、より効果的な指導技術を開発する。
- ②「論理的文章」の四つの種類（記録・説明・報告・論説）の特質を明らかにし、その特質に応じた書き方の指導方法を確立する。

8 まとめ

これまでの国語科教育は、進んだ西洋の文明を取り入れようとした明治時代からの受信的な学習の流れから、「読むこと」に重きを置いた学習が中心であった。しかし、現在の日本は科学的にも経済的にも大きく発展を遂げ、進んだ技術や情報を発信すべき立場にある。今後の国語科教育では、より発信的な学習における論理的思考力・表現力の育成が重要であり、その1つの手立てとして市毛式小論文指導が有効であったことを報告する。

〈注〉

- 1)『読売新聞』2016年2月20日 37面
- 2)「大学の実力 文章書けますか」(特集)『読売新聞』2016年7月8日
- 3)「小学校における小論文指導」小川智勢子 全国大学国語教育学会第126回名古屋大会(2014年5月18日)口頭発表資料
- 4)市毛勝雄『小論文の書き方指導 4時間の授業で「導入」から「評価」まで』明治図書2010 p 15
- 5)市毛勝雄『小論文の書き方指導 4時間の授業で「導入」から「評価」まで』明治図書2010

pp14-15

6) 市毛勝雄『小論文の書き方指導 4時間の授業で「導入」から「評価」まで』明治図書 2010 p121

7) 市毛勝雄編『新国語科の重点指導第1巻 論理的思考力の育て方〈重点指導項目20〉』明治図書
2009 pp70-75

8) 市毛勝雄『小論文の書き方指導 4時間の授業で「導入」から「評価」まで』明治図書 2010

〈付録1〉教材「小論文の書き方」

小論文（報告）の書き方（小中・各教科共通）
名前

1 形式（40字小論文の例）

構成	役割	文字数
はじめ	全体のあらましを書く。	2行④字以内。
なか	1 一つの具体例をくわしく書く。 感想・意見は書かない。	7行④字以内。
	2 「なか1」とは別の具体例を一つ書く。感想・意見は書かない。	7行④字以内。
まとめ	「1」と「2」とに共通する感想・意見を書く。	2行④字以内。
むすび	「まとめ」の感想・意見がすべての人にあてはまるという主張を書く。	2行④字以内。 (論説だけ)

2 論理的文章（科学的文章）の構成

- (1) 記録 このあたりを時間通りに書いた文章。「なか1・なか2・なか3...」。(日記・観察記録・実験記録)
- (2) 報告 新しいことからの発見をくわしく書いた文章。発見したことを発表すること。自然科学の論文はすべてこの報告である。報告の文章は決められた形式「はじめ・なか1・なか2...まとめ」で書かれる。「なか」は文章・写真・図表等、(1)シート、自然科学分野では必ずシートが添付されている。現象・事実観察の報告は、事象の過程とその論議を交えて「事実」として書かれる。
- (3) 論説 多くの記録・報告をもとにして、さいい「主張」(仮説)を述べた文章。経済学・教育学・社会学等の論文、新聞社説、月刊雑誌(文藝春秋・中公論等)の論文など。
- (4) 説明 新しいこと・もの、珍しいこと・ものの性質・性能などをわかりやすく書いた文章。わかりやすく話して説明すること(口頭発表、オリエンテーションなど)言う。「はじめ・なか1・なか2・なか3...まとめ」の形式によって述べる。

3 キーワード

テーマ	なつやすみ	(報告)
題名	おまつり	(テーマと区別する)
	おまつり	(さいめい)
	おまつりに行った。	① (はじめ)
	おめんを買った。	② (なか1)
	やまをばをだへだ。	③ (なか2)
	だのしかった。	④ (まとめ)

キーワード表（「おまつり」から抜き出す）

キーワード	段階	文章構成
	①	はじめ
	②	なか1
	③	なか2
	④	まとめ

4 小論文を書くときの注意

- (1) 「です、ます」を使わず、「である」を使う。
(「楽しかったです。」のように幼稚な文になるから)
- (2) 慣用語を使わない。(文章の個性がなくなるから)
×テストは楽勝だった。→○テストはやりしかなかった。
- (3) 「...ない。」という否定表現は内容をあいまいにする。
肯定表現で書く。×構成ではない。→○良かった。
- (4) 「...して、そして、それから」を避けるべき。
(中心がわかりにくい文章になる)
×朝起きて、そしてご飯をたべて、かばんを持って...
(5) 「」は意味の切れ目に一文に「か所だけ、うつ。
×うんこの場所で食事しよう。
→○うん、この場所で食事しよう。
- (6) 名詞で文を切るのは詩の書き方で、意味があいまいになるから、小論文では使わない。
×わたしの好きな花は、ばら。→○わたしはばらの花が好きだ。
- (7) 「はじめ」には感想・意見は書かない。
(感想・意見は「まとめ」に書く)
×四月十日に行った山中公園はとても楽しかった。
→○四月十日に山中公園に行った。
- (8) 「なか1・なか2」を詳しく書く主な技術は次の通りである。
- 地名、人名、交通機関名、日付、時刻、品名、値段、個数などを書く。
×ある日の午後、町で友人に会った。
→○十日、午後三時ごろ、山川書店で吉野さんに会った。
 - 会話の文は、小論文では改行しないで続けて書く。
○母さんが「今日はおそくなるわ」と言った。わたしは「夕食のしだくをしておくと」と答えた。
 - 場面の中心を決めて、中心をくわしく書く。
×朝起きて、顔をあらって、ごはんを食べて...
○朝六時に食事のしだくを始める。おそろ4枚に入...
 - 「なか1」と「なか2」が時間やところがたっている。一つの例と区別される。区別された二つの例が必要である。
 - 「なか」では、このあたりだけをくわしく書く。感想・意見を最後に書かない。
×おかつの準備はともめんとした。なぜかとうとう...
→○おかつの準備は、みそ汁の味を究つてから始める...
 - 「たとえば、比喩、金言、名詞」の引用は、言葉であつて事実ではないから、「なか」の役割を果たさない。
×数々のそうじは、言わば「心の整理」だ...
→○数々のそうじは、家を片付けることからはじめる...
- (9) 「まとめ」を書くとき、いくつかの「なか(具体例)」の中から「まとめ」の観点にのびたりな例を選び直す。一貫性のある論文になる。
- (10) 論文を書く順序としては、「なか2」→「なか1」→「まとめ」→「(むすび)」→「はじめ」の順に書くべきである。
- (11) 「題名」は小論文を全読書してから決める。「はじめ」「むすび」のキーワードから選んでよい題名になる。
- (12) 「むすび(主題)」は「まとめ(個人の感想・意見)」が「多くの人に共通すること(一般化)」を述べる。(高校以上)
(まとめ) 母さんだけでなく心細かった。(感想)
→(むすび) 家族の大切さがわかった。(一般化)

〈付録2〉教材「キーワード表」

【キーワード表】

テーマ

学籍番号

氏名

「なか」に書くこと

1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	

まとめの表

なか1	
なか2	
まとめ	

〈付録3〉教材「どちらがじょうずかな」

どちらがじょうずかな

氏名()

「小論文の書き方」プリントを読んで、じょうずだと思う方に○をつけましょう。

【はじめ】

① () わたしは、十月一日に大島公園に行った。

() わたしは、十月一日に大島公園に行っても楽しかった。

② () きのうのなわとび大会は、みんなで力をあわせてがんばった。

() なわとび大会の日は、よく晴れてあたたかな日だった。

【なか】

③ () なわとび大会で、わたしは二重とびとあやとびをがんばった。

() クラスのみんなで八の字とびもうまくできたので、とてもうれしかった。

() なわとび大会で、八の字とびは五分間で四二〇回とべた。とぶ順番をみんなで作ったり、失敗した人をはげましたりして今までの最高記録が出た。

④ () 公園の入り口には、赤くて大きなバラの花が咲いていた。ベンチのそばには白くて小さなバラの花が咲いていた。風がふくとバラの花のあまい香りがあたりにあふれた。

() 公園にはバラやアジサイなどいろいろな花がきれいに咲いていた。池にはこいやあひるが泳いでいた。ブランコやすべり台では子どもがたくさん遊んでいた。

【まとめ】

⑤ () なわとび大会は、まあまあ楽しい思い出となったような気がする。

() なわとび大会は、みんなで力を合わせてがんばった。

⑥ () 大島公園は、きれいで心が落ち着くよい場所である。

() 大島公園は、遠いのはいやだが、きれいなのはよいと思う。

【むすび】

⑦ () 協力することで、大きな力を発揮できることが分かった。

() 協力して八の字とびがたくさん跳べたので、楽しかった。

⑧ () 大島公園は落ち着くが、他にもっと運動できる公園も必要だ。

() 大島公園のような市民の憩いの場所を、もっと作って欲しい。